

校内別室を活用した教室復帰について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校のときは不登校ではなかったものの、友人関係の構築に困難を抱え、悩みなどを気軽に相談できる友人が少なかった。中学校 1 年生の夏頃から学習に対する不安が大きくなり、欠席が目立ち始めた。校内委員会で検討の後、夏休みに入る前に校内別室の利用を開始した。保護者は、継続的に見守りと励ましを行った。

具体的な取組

○別室対応による支援

学級での生活と学習に対する不安が重なり、欠席が目立ち始めたことから、担任および学年は、生徒に校内別室の利用を提案した。周囲を気にせず登校できることにより、登校日数が回復した。校内別室にて給食の喫食を開始したことも登校意欲の維持につながった。

○個別対応による居場所になる取組

校内別室において、支援員による見守りを続けた。生徒は自ら一日の活動内容決め、読書や自主学習などに取り組んだ。支援員とのコミュニケーションを重ねるにつれ、表情が明るくなり、生徒から他者への働きかけも見られるようになった。



○生徒指導を意識した授業の展開

学習意欲が回復した生徒から授業参加の希望があった。参加希望があった教科の担任は学習不安がある生徒に配慮し、既習内容を見やすくした授業展開や簡潔な発問、生徒同士の活動量の調整などを行い、生徒が安心して参加できる授業改善を行った。

○S C との連携による生徒理解

校内別室への登校を続ける中で、S C との定期的な面談を行った。回を重ねるごとに S C に対して安心できるようになり、日常における不安を打ち明けることができた。校内委員会において情報共有を行うことで、学年・学級・校内別室が連携して支援する体制を構築することができた。

成果

校内別室を利用してから、週 4 日の登校が継続できた。教職員との関わりを通して、コミュニケーション能力と意欲の向上が見られた。自主学習や一部授業への参加により、学級参加の意欲が向上した。学校行事や学級活動に参加することができた。

課題

教室参加の機会を活用し、班活動などを通じた友人関係の構築を支援する。授業改善を進め、学習への不安軽減を行う。

校内別室や通級と連携した、多方面からの支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、他人の言動や視線、どう思われているかなどを過度に気にしてしまい、集団への適応が困難となった。また、外国にルーツのある生徒であり、日本語への苦手意識があり、友達と会話を気楽にできなかった。日本語の理解に困難さがあり、特別支援教室を利用している。

具体的な取組

○教職員とのコミュニケーション

異性の担任への抵抗感が強かったため、特別支援教室の担任・支援員等、担任以外の複数の教職員が生徒とつながる状況をつくった。それぞれが一对一で十分にコミュニケーションを取れる時間をとった。

○校内別室の体制づくり

不登校生徒が自分のペースで登校できる校内別室の仕組みを整えた。友人と複数人で訪れてもよい時間帯など、当該生徒が安心して登校できる環境を整備した。また、学習支援のための部屋も準備し、どちらも使えるようにした。



○校内別室での給食の喫食

人前での食事に大きな抵抗感があることに配慮し、校内別室での喫食を認めた。一方、生徒と相談の上、配膳は在籍学級から当該生徒が取ってくることを約束事とし、当該生徒の気持ちに寄り添いながら在籍学級とのつながりを絶やさないようにした。

○特別支援教室での指導の充実

在籍学級での生活において把握した課題について、特別支援教室の担当教員と当該生徒の課題や発達の特性の共有等を図った。特別支援教室にてコミュニケーション能力を高める指導に注力している。

成果

頼れる教職員が複数になったことで、自分の気持ちや状況を詳しく話せるようになってきた。校内別室の他にも居場所ができ、学校への信頼感を高められた結果、登校頻度が週3日程度へと増えた。

課題

教科の授業へ復帰していくこと。次年度に向けて、本人の心理的負担とバランスを取りながら進めていく必要がある。

個別対応による登校意欲の向上について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校高学年時に、持病の治療のため2度の入院を経験した。退院後に登校を再開したが、長期間欠席していたことから、周囲の人間関係の変化や学校への不安感が重なり、6年生の2学期から不登校となった。中学校の入学式には参加できたが、不登校は継続した。中学校1年生の終わり頃から保健室への登校を始めた。

具体的な取組

○SSWとの連携

1年生の1学期には登校ができず、学級担任からの家庭連絡にも応じることが少なかった。校内委員会での協議の後、SSWとの連携を開始した。SSWによる家庭訪問により、当該生徒・保護者との関係性の構築ができた。また、生徒の外出意欲が回復した。

○生徒の情報収集

学級担任は、在籍の小学校から本人の様子や欠席の状況、友人関係等の聞き取りを行った。さらに、SSWから聞き取った様子から、校内委員会にて支援の方針を協議した。保護者への相談の後、教室以外の場所への登校から取り組む方針が決定できた。

○養護教諭による居場所の取組

学校への登校に慣れさせることを目的に、教室以外の登校場所として保健室への登校を開始した。養護教諭による対応により、コミュニケーションを取る場面が増えた。学校の滞在時間も増え、登校頻度も安定して増えた。

○別室対応による支援

保健室登校により登校が安定したため、不登校対応巡回教員が主体となって登校場所を校内別室に切り替えた。校内別室では、1日2時間の自主学習に意欲的に取り組んだ。登校頻度の安定と、学習意欲の向上につながった。



成果

SSWとの連携によって対人不安が緩和され、学校とのつながりを構築することができた。また、生徒の状況を把握し、校内別室対応を行ったことで、登校意欲と学習意欲の向上が見られた。

課題

小学校から継続して不登校である生徒を支援するためには、小学校との情報交換を丁寧に行う必要がある。

生徒・保護者に寄り添った登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学生の時は、不登校傾向は見られなかったものの精神的に不安定な様子があった。中学生になり、夏休み明け頃から欠席が目立ち始めた。周囲との大きなトラブルの様子はなく、学習へのつまずきも見られなかったが、具体的な原因については語ろうとしない。

具体的な取組

○校内委員会の実施

担任や当該生徒の学年の意向により、校内委員会にて事例の検討を行った。担任による保護者への聞き取りを基に、校内委員会メンバーで対応を検討した。原因が明らかでない現状において、生徒自身が安心できる個別の環境から徐々に登校を促していくよう方向性を定めた。

○ＳＣの活用

生徒が学級に対する何らかの抵抗感を感じている様子から、ＳＣの利用を促した。リラックスして会話をすることで、生徒自身が抱えている不安についても徐々に相談できるようになった。また、定期的な面談設定が、登校復帰のきっかけとなった。

○校内別室対応での個別指導

今年度新たに、登校時間や活動内容を限定しない自由登校教室を不登校対応巡回教員が担当した。登校自体を目的としている教室のため、生徒は自由登校教室にて教員との会話を楽しんだり、学習について相談したりした。個別での対応が、登校復帰のきっかけとなった。

○校内別室対応での少人数指導

ＳＣの利用や自由登校教室を進めたことで、登校への意欲が高まった。在席学級での生活を苦手とする生徒のための校内別室では、支援員による支援を行った。

次第に他生徒とのコミュニケーションが増え、継続的な登校につながった。



成果

担任の働きかけから、生徒のＳＣ利用や校内別室利用が始まり、継続的な登校復帰につなげることができた。役割の異なる多くの大人が少しずつ関わることで、生徒の周囲に対する不安感を軽減できた。

課題

現段階では、生徒の根本的な原因解決に至っていない。引き続き、生徒に寄り添い、生徒自身の問題に対応できる力を育んでいく。

校内別室を活用した登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生であり、小学生の頃から度々欠席する様子が見られた。中学校に進学し、初めの一週間ほどは登校していたが、徐々に不登校となった。生徒の周辺では原因となる大きなトラブルは見られなかった。家にいる間は、保護者も仕事に出てしまい一人で過ごす時間が多く、生活リズムが乱れることがあった。

具体的な取組

○1 年生を中心とした学習支援

1 年生の授業を巡回し、学級全体の学習活動に対して遅れや困難さが見られる生徒に寄り添い、学習の補助を行った。教員の発問や指示、板書内容を一緒に確認した。

○校内別での室対応

学級や集団での活動場面を苦手とする当該生徒に対し、教員間で校内別室利用の検討を行い、支援員による校内別室対応を行った。生徒は校内別室にて、決まった時間に登校し、読書や自主学習などをして過ごした。学級での活動に興味が見られた場面では教室参加を促した。

○生徒とのコミュニケーション

校内別室にて当該生徒と接する中で、読書や自主学習の時間以外でコミュニケーションをとった。初めはなかなか話しづらかった当該生徒も、少しずつ会話の量が増え、家庭での生活の様子や困っていることを話すようになった。

○教職員間での情報共有

学習支援や校内別室での生徒対応の中で見られた生徒の様子や情報について、学級担任に共有し、共通した生徒対応を行った。また、必要に応じて S C につなげるなどして、生徒が安心感を得られる支援を行った。



成果

当該生徒は、巡回教員の声かけや校内別室の利用により、継続的に登校する様子が見られた。また、生徒が学級での授業や活動に興味を示した際に、適宜声をかけることによって学級に参加することができた。

課題

教科担任と協力し、学習を苦手とする生徒が取り組みやすい工夫を行う。校内別室と学級とのつながりを強くする。